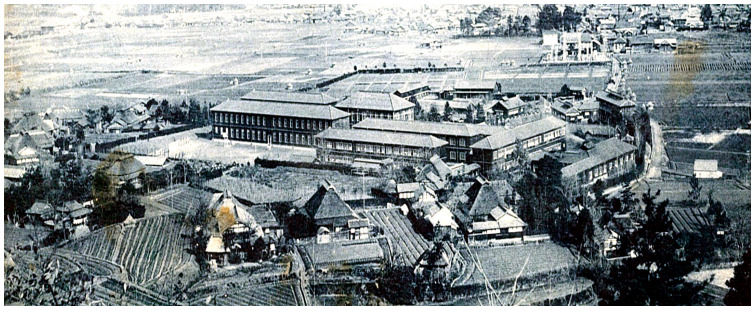
山口県立小郡農業学校



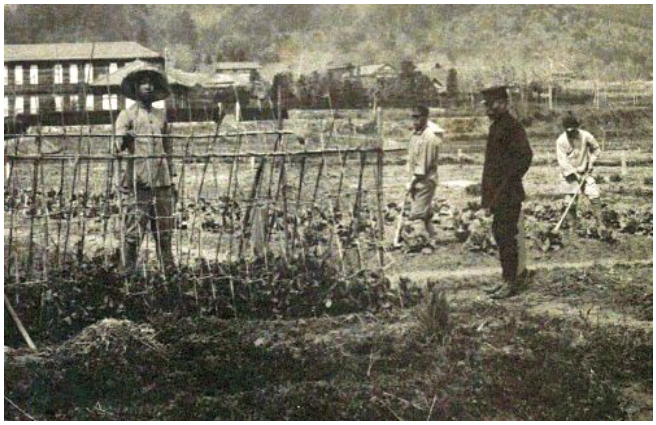
山口県立小郡農業学校　山手校舎全景

山口県立農業学校は、明治43（1910）年には小郡町の山手校舎に移転し、山口県では、唯一の甲種農業学校として農業教育の中核を担い発展を続けていた。

大正４(1915)年には予科を廃止し、農・林・養蚕・獣医畜産の４科とした。大正１２年、大津農林学校が県に移管され山口県立日置農林学校となったことにともない、山口県立小郡農業学校と改称した。昭和１９（1944）年に、山口県立小郡高等女学校を統合し、昭和２３年の学制により山口県立山口農業高等学校と改称し新制高等学校へと変わっていくこととなる。

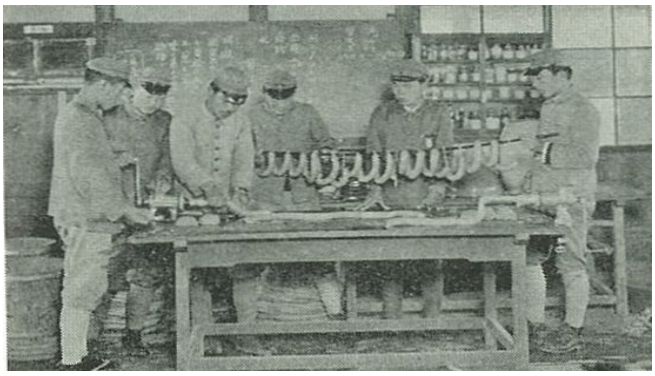
実習

授業は、大正・昭和を通じて終戦まで基本的に午前中に学科、午後に実習という形で行われた。



農科蔬菜実習

林科害虫駆除実習



ソーセージの製造実習
（『山口県立山口農業学校百年史』より）

実習服はカーキ色、折り襟の上下服、ゲートル地下足袋姿であった。獣医畜産科は昭和の初めは実習服としてカーキ色のオーバーのようなものを着用し、ゲートル地下足袋は必要に応じて使用したが、後には農科や養蚕科と同じ実習服になった。

獣医科附属家畜病院の設置

獣医畜産科実習

獣医科の実習は、農科・養蚕科とは別に行った

大正３（1914）年、従来獣医科の実習に使用されていた手術室兼解剖室を一般の家畜の診断、治療および入院のための病院として、また、生徒の研究を深める実習材料の場として開設した。獣医師は農学校の獣医科教員が担当し、校外治療の依頼にも応じた。

寄宿舎

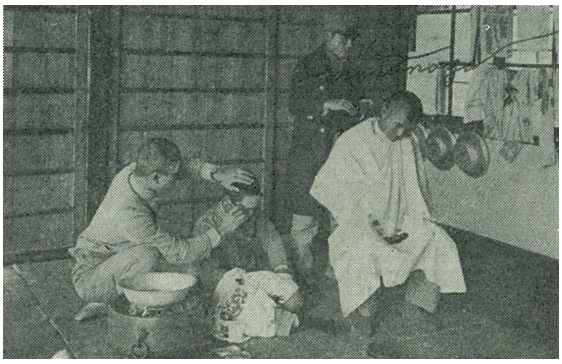
大正期における農業学校の教育方針である技能の習得とともに、徳性の涵養と人格の陶冶は主として寄宿舎での生活や実習で指導された。昭和に入ってからは寄宿舎に教練教官が舎監心得として配属され、訓育の徹底が図られた。農業精神、勤労精神の高揚のため、寄宿舎では勤労主義作業が重視され、舎の周辺には菜園、果樹園、養鶏場が設けられた。勤労作業は、朝食や実習の後のわずかな時間に行われた。

明治43年に完成した寄宿舎

（『山口県立山口農業学校百年史』より）

洗濯も自分たちで

（『山口県立山口農業学校百年史』より）



散髪は交代で行う

（『山口県立山口農業学校百年史』より）